

思春期における発達障害への理解と支援

上 手 由 香

Understanding and Supporting Adolescents with Development Disorders

Yuka KAMITE

1. はじめに

思春期とは「嵐の時期」と呼ばれるなど、心理的な混乱が体験されると言われてきた。子どもから大人への過渡期に、私たちの心は複雑になり、それまでにないような自意識に悩まされる。無邪気な子ども時代は過ぎ、自分は浮いていないか、人からどう見られているのかといった、自己意識の高まりや他者との比較が主な関心事となる。多くの人の人生にとって、思春期とはライフサイクルにおける一つの危機であり、悩み大きい年頃である。それは発達障害のある子どもにとっても、同じことが言える。さらに筆者のこれまでの臨床経験では、発達障害のある子にとって、思春期は特に大きな難関であるように感じられる。

小学校から中学校に入ると、子どもたちの世界は格段に広がりを見せる。クラスだけでなく、部活や塾などで交遊範囲は広がり、友人関係は複雑になる。授業の難易度も上がり、さらには卒業後の進路を決めるという課題も待ち受けている。成績を競わせるなど、小学校よりも競争主義的な風潮も強まるだろう。このような周囲の変化は、発達障害を抱える子どもにとって、様々な面で周囲との差異を感じたり、孤独感や自尊心が傷つく体験となりかねない。

本稿ではまず発達障害のある子が思春期につまづきやすい問題について概観し、その際筆者が関わってきた臨床事例を提示する。そして、発達障害のある子が思春期を迎えた際に、周囲がどのように支えることができるのかについて考察したい。

2. 「見えにくい障害」としての発達障害

発達障害には自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動性障害、学習障害、その他これに類する脳機能障害が含まれ、通常、低年齢で発現するものと定義されている。発達障害のある子は、知的発達全体の大きな障害はなくても、脳の高次機能がうまく働かないことで日常生活上にさまざまな問題を生じさせる。また、発達障害のある子どもは発達が盛んな乳幼児期の発達の順番が定形発達の場合と異なっていたり、部分的な遅れが見られることがある。しかし、乳幼児期に発達のところどころに「おかしさ」が見られることがあっても、その後、一見何の問題もないように見えることもある。そして、そのまま発達障害に気づかれずに大人になることも往々にしてある。そのため、発達障害は、「障害らしくない障害」「見えにくい障害」と言われる（鳥居, 2009）。

しかし、発達障害のある子でも幼児期や小学校の低学年では目立たなかった問題が、小学校の高学年以上になると、周りの子どもたちから「あの子は何か変」と違和感をもたれる可能性が高い。これは後に述べるように、この時期になると、子どもたちの友人関係は複雑に変化し、発達障害の子どもたちが苦手とする対人関係にまつわるさまざまな障害が目につきやすくなるからである。しかし、発達障害のある子の中でも、対人関係でトラブルが生じやすいタイプと、そうでないタイプもいるだろう。

Wing (1997) は、自閉症スペクトラム障害の人付き合いのタイプを大きく「孤立群」「受動群」「積極・奇異群」「形式ばった大仰な群」の4つに分類している (Table 1)。この分類を見ると、自閉症スペクトラムに特徴的な社会性の障害はさまざまな形で現れ、集団の中で目立ちやすいタイプとそうでないタイプがあることがわかる。例えば「受動群」の場合、受動性が高く周囲に合わせることが多いため、目立ったトラブルが生じにくく、発達障害であることが見過ごされたままである場合も多いと思われる。そしてWingはこれらの4類型に明確な区切りがある訳ではないと述べている。さらに各類型の行動パターンがライフサイクルの各段階で現れやすい時期があるため、ある時期に一つの類型の特徴に当てはまるからといって、それが生涯固定された人付き合いのパターンとなるわけではない。特に思春期は発達障害の問題がそれまでよりもクリアに現れやすい時期であると同時に、自分の特徴を知ること、自助努力の道を開くことにもなる。また、何かきっかけで自信が持てるようになると、見違えるように活き活きとし始める例も多々見られる。そのため思春期は発達障害のある子にとって難関であるものの、その後の人生を支える基盤作りの時期にもなりうると思われる。

Table 1 Wingの自閉症のスペクトラム障害における対人関係の類型

孤立群	他人への関心を示さず、まるで他人が存在しないかのように振る舞う。幼少期に現れやすい社会性の障害であり、生涯続くこともあるが、成長するにつれて変化することもある。
受動群	自分から人に関わろうとはしないが、他から全く孤立しているわけではなく、人との接触は受け入れる。問題行動が最も少ないタイプだが、青年期に際立った変化が起きて行動に異常が現れる場合もある。
積極・奇異群	世話をしてくれる人に対して他人に活発に近づこうとする。何かを要求する時や自分の関心ごとを独特の一方通行で延々と述べる。話し相手の感情やニーズには注意を払わない。自分の思い通りに周囲が関心を示さないと、扱いにくくなったり攻撃的になることもある。
形式ばった大仰な群	過度に礼儀正しく堅苦しいふるまいをする。うまく振る舞うために非常な努力をし、人付き合いのルールに厳格にこだわるが、ルールの本質を理解していないので、状況の変化に対応することに、独特の困難さを伴う。最も能力が高く、良好な言語レベルの人に現れる。この行動パターンは、青年期後期から成人期になるまでは見られない。

(Wing, 1997, 久保ら監訳, 1998より作成)

3. 自己概念の発達

思春期は身体的にも心理的にも子どもから大人へと変化する時期であるが、心は複雑になり、それゆえにさまざまな悩みが生じる。これは脳の発達に由来するものでもあり、この時期を通して私たちは高度な認知機能や言語能力が発達していくと言われる。Coleman & Hendry (1999)

は、思春期は身体的、認知的、情緒的な成長に伴い自己概念が急激に発達すると述べている。それまで自己概念が、自分は運動が得意、明るいなど一面的なものであったのが、認知機能の発達により、「学校では明るいけれども、一人でいる時は悩みやすい」など、自分を異なった視点から捉える能力が発達する。そしてこの時期に、自分自身の関心や欲求を、自分の両親や重要な他者のそれと区別し始めることも課題となる。このように思春期は、自分自身をさまざまな視点から捉え直すとともに、他者の考えと自分の考えの相違を認識し、自己像や価値観を形成していく時期であるといえる。

しかし、発達障害のある子の場合、程度の差はあるものの、自分のことを客観的にとらえることに不得手さが見られ、自己概念の発達も定型発達の場合とは異なることが指摘されている。滝吉・田中（2011）は、広汎性発達障害者の思春期・青年期の自己理解において、人格特性といった内的な特性よりも、身体的・外的属性や行動スタイルといった事実や視覚的に認識しやすい特性において自己を理解する割合が高いことを明らかにした。さらに、定型発達の場合は他者との相互的な関係性の中で、自己を肯定的に理解する傾向があるのに対して、広汎性発達障害者の場合、相互性のある対人関係では自己を否定的に捉えるという相違が明らかとなっている。

発達障害のある子は思春期頃になると、自分は周囲とは何か違う、変だと違和感を持ちながらも、コミュニケーションの苦手さから、他者との関係の中でその不全感を解決することが難しく、かえって孤立感を高めるという悪循環が生じやすい。また、自分の興味の無いものには全く無関心になってしまうことも少なくない。例えば次に示す事例は、学校での勉強に興味を持てずに、それが不登校の一因となった事例である。なお本稿で提示する事例は、筆者が関わった実際の臨床事例をもとに、事例の本質は残しながら、個人情報にかかわる部分には修正を加えたものである。

<事例1 A君（中学1年生・男子）>

A君は小学校の高学年から短期間の不登校を繰り返してきた。学校でのA君はおとなしく従順で、不登校の理由となるような明確なトラブルはなく、母親はどうして学校に行けないのか不思議でならなかった。中学に入ってから登校時に頭痛を訴え、学校を休みがちになった。総合病院を受診するが、身体的な異状が認められなかったため、筆者の勤務する精神科クリニックへの受診に至った。A君は心理検査と生育歴の聴取の結果、軽度ではあるが自閉症スペクトラム障害が疑われた。筆者がカウンセリングを担当することとなり、A君との面接を始めると、A君は学校の授業や行事に全く関心が持てず、学校に行く意味がわからないと言った。また、クラスの騒がしい雰囲気にもなじまず、入部したサッカー部の練習にもついていけないようだった。学校生活については、筆者からの質問に一問一答のように言葉少なに答える反面、自分の好きな電車や昆虫については雄弁に語り、カウンセリングにも関連書を持参して説明してくれた。そして将来は昆虫の研究がしたいと話した。カウンセリングではA君の好きな電車や昆虫の話題を中心に聞きながら、筆者は「学校は行く意味がわからなくても行かなければいけないところ」と明言し、「将来、昆虫の研究がしたければ、それ以外の勉強もする必要がある」と励ました。A君はその後、サッカー部を退部し、数人の友人グループができ、徐々に学校内での居場所ができていった。また、頭痛は時折あるものの、頭痛があっても学校は休まずに通えるようになっていった。

A君の場合、自分の興味関心のあるもの（電車、昆虫）には積極的に関心を示すものの、それ以外のもの（勉強、行事）に全く無関心で、学校に行く意味が感じられず、またクラスや部活の雰囲気に馴染めなかったことなどが不登校の一因になっていたと思われる。A君の内的世界は、自分の興味関心の世界に限られており、それ以外のものを排除した世界であったといえるだ

ろう。しかし、対人関係でトラブルを起こすようなことはなく、Wing の分類では「受動群」に属するタイプである。また A 君は学校で感じる不全感が意識化されておらず、それが頭痛という身体症状として現れていたとも考えられる。発達障害のある子が思春期になり、頭痛や腹痛など、何らかの身体症状を呈することは多くみられる。また、抜毛や身体を掻きむしるなどの自傷行為が見られる場合もある。これは発達障害のある子は、他者の気持ちを理解するという共感性の障害がある場合が多いが、同時に自分の感情の認識も苦手であり、現実生活で感じるストレスを身体症状の形で表現しているとも言えるだろう。身体症状に隠された心の声を支援者が言語化する手助けをすることはもとより、別の適応的な形でストレスを発散する方法を見つけることも重要である。

4. 身体的変化への戸惑い

思春期とは、第二性徴の開始から終了までの時期を指し、子どもから大人の身体へと大きく変貌する時期である。第二性徴の開始時期には個人差があるものの、多くは小学校高学年頃から性腺が活発になり、性ホルモンの分泌により、男女それぞれが特徴ある体型に変化していく。女性は胸が膨らみ、皮下脂肪が蓄積され丸みを帯びた体型に変化し、排卵の誘発により月経が開始する。男性は筋肉質の身体つきになり、ひげが生え始めたり、声変わりが起こる。また陰茎や睾丸が発達し、精通が現れる。このように、それぞれの性別により、異なった体つきへと成長を遂げることとなる。こうした身体的変化は、多くの場合戸惑いを持って体験されることが多い。

また、自分の身体的な性別が男か女かどうかは幼児の段階で認知するようになるが、自分自身の性的な関心や意識の統合は、思春期を含めて青年期の重要な課題となる。そして、社会や親から影響を受けたステレオタイプの性的役割観をそのまま取り入れるのではなく、自己との折り合いをつけ、また社会的にも認められるかたちに統合していくことが思春期の重要な課題といえる。

思春期を問わず、発達障害と身体というのは大きな課題である。発達障害のある子が、手先の不器用さや運動の問題を抱えていることが指摘されてきた。中には突出した身体能力や器用さを持つ子どもも見られるが、指先や唇・舌・喉・表情筋といった微細運動や、手足を動かすような粗大運動の不器用さを伴う子どもも多い（吉田，2003）。また、音や触覚・嗅覚などの感覚過敏が見られる一方、痛みや暑さ・寒さには鈍感などの感覚異常が見られる場合もある。こうした自分の身体的な特性を理解し、うまく折り合いをつけていくことは、発達障害のある子が日常生活を送るうえで非常に重要なことである。

さらに発達障害のある子の場合、第二性徴による身体的変化に強い嫌悪感を示す事例も見られる。例えば、女性らしく丸みを帯びた身体への変化を受け入れられず、過度なダイエットに走ってしまったり、体毛に不潔感を感じ抜毛をするなど、極端な行動に現れる場合もある。また、身体的には成熟しても、それが他者からどのように見られているかという視点を持ちにくいいため、本人は意図せずとも、露出度の高い無防備な服装で異性の前に現れることもある。身体的成熟と心理的成熟にギャップが生じるのである。これは特に女子の場合は性被害の危険にもつながるため、周囲から明確に働きかける必要もあるだろう。またその他にもさまざまな性的な行動が、本人には悪意はなくても周囲を驚かせることがある。例えば、人前で自分の性器に触れる、好意を持った女性の至近距離を歩き恐怖を与えてしまう、などである。川上・辻井（2011）は、

特に男児はこのような問題行動が表面化しやすく社会的にも問題になりやすいため、早急な性教育プログラムの構築が求められると指摘している。

5. 友人関係での傷つき

思春期の子どもたちにとって最も関心があり、かつ困難さを併せ持つのが友人関係といえるだろう。思春期の友人関係の特殊さ、重要性は古くから指摘されてきている。Sullivan (1953) はこの時期に同性の友人との親密な関係（チャムシップ）を持つことの重要性を指摘し、親友の目を通して自分自身を見つめることができるようになり、このことが自己像の形成に重要であると述べた。重要な他者との親密な関係は、思春期の子どもにとって、心理的な充足だけでなく、友人関係を通じた自己像の形成にもつながっていく。

保坂 (2010) は、思春期前半の互いの共通点や類似性を確かめあい、仲間との一体感を確認しあう関係から、思春期後半になると、お互いの価値観や理想などを語り合う関係性へと変化し、お互いの違いを認めあえる相互に自立した関係性へと変化していくと述べた。そしてこの関係を、ギャンググループからチャムグループ、そしてピアグループへの変化と呼んだ。このように、小学校高学年くらいから、友人関係は同質性を重視した関係から、個を認め合う関係へと発達していく。発達障害の子どもにとって、この思春期特有の同質性を求める友人関係は、一つの難関となる。

児童期の友人関係が仲良しグループはあっても、各自が比較的独立した緩やかなつながりであったものから、この時期のグループは結束が強く、異質な者を排除する機能が高まる。その際、発達障害のある子が異質な者としてグループから排除されることが生じやすい。例えば、社会規範へのこだわりが強く、グループ内のルールを守れないという場合もあるだろう。先述のギャンググループと言われる時期では、集団で反社会的な行動をすることで、グループの結束を固めるという特徴も見られる。この場合、発達障害のある子が1人「正しいこと」を主張し、場をしらけさせたり、グループからはじき出されることもある。そもそも、こういったことにスリルや関心が得られない場合も多いだろう。アスペルガー障害の当事者であるニキリンコ氏は著書の中で、自閉症者が規則を守り道徳的になることについて、「言われたことは守った方がラクでしょう。言われたこと以外の選択肢を思い浮かべてあれこれ勘案するのってかえって脳に負担がかかる (ニキ, 2007)」と表現した。また、対人関係で生じる複雑な感情が理解できずに、周囲から疎まれることもある。例えばニキ氏は、自分が他者に対して「うらやましい」という感情が持てないということについて、次のように表現した。

“私はほかのだれかのことを「うらやましい」と思うことはないけど、それは、無欲だからでもなければ、謙虚だからでもない。今の境遇がサイコーだからでもない。むつかしくてできないのだ。くり下がりのある引き算がむつかしいのと同じだ。(ニキ, 2007)”

他者と自分を比較し、一喜一憂しやすい思春期には、他者へのねたみや羨望は比較的体験されやすい感情である。しかし、ニキ氏が述べるように発達障害のある子の場合、こうした複雑で抽象的な感情を持つことや、そのような感情を周囲が抱いていることを想像することが難しい。その結果、周囲からすると「いい子ぶる」「真面目」と捉えられ、浮いてしまうということにもな

りかねない。同質性を重視する思春期の友人関係においては、周囲と波長を合わせられないことは、いじめや仲間外れの一因ともなる。

次に紹介するのは、発達障害のある子が思春期の女子のグループをどのように体験したかを示す一例である。

<事例2 B子さん(高校1年生・女子)>

Bさんは中学生の頃は、学期の始めはクラスに入れるものの、その後1ヶ月もしないうちに教室に入れなくなり、学校内にある特別教室に登校するというパターンを繰り返してきた。スクールカウンセラーから紹介され、Bさんは大学の相談室を訪れ、筆者がカウンセリングを担当することとなった。心理検査と生育歴の聴取の結果、Bさんは言語性能力は高いものの、対人コミュニケーションの苦手さや空間認知の弱さなどが見られ、軽度の発達障害が疑われた。カウンセリングでわかってきたことは、Bさんは学校生活での些細な失敗(体育の授業で片方の靴下が下がったまま走っていた、リコーダーの演奏で高い音が出てしまった、など)が繰り返し頭をよぎり、失敗を繰り返すことを恐れて教室に入れなくなってしまったということであった。また、おとなしいBさんを気遣い、声をかけてくれる生徒が現れても、聞かれたことに「はい」か「いいえ」でしか答えられず、会話が続かないということがわかった。女子のグループに入っても、友人たちが授業中に手紙を回してくることにイライラしたり、教室移動がおしゃべりで遅くなることも嫌だったと話した。このように雑談が苦手なBさんにとって、カウンセリングの中で筆者との対話は、雑談の練習の役割を担うこととなった。その後、高校進学を機に友人関係が広がり、女子のグループの中で自分から積極的に会話に参加はしないものの、それなりにうまく過ごすことができるようになっていったり、自分にとっては男子との会話の方がわかりやすく楽しくということにも気づいていった。またこの頃には、Bさんは自分がずっと気にしていた過去の失敗を、大した失敗ではなかったと捉え直しができるようになっていった。

例えば、中学生の女子生徒によく見られる休憩時間に一緒にトイレに行くという行為や、Bさんがイライラしたような他愛のないおしゃべりは、その行動そのものにはそれほど意味がなく、行為を共有することで親密な関係であることを確認するという意味もたらされる。このように一見無意味な行動は、目に見えないもの、曖昧なものの理解が苦手な発達障害のある子にとっては、理解が難しい。そのため、意味を感じられないものは回避されたり、Bさんのように苛立を感じる場合もある。事例1のA君も、学校に通うことに意味を見いだせずに不登校となっている。このように、意味があるか無いかといった二者択一的な思考に陥りやすいため、自分には無意味に思えても必要なこともあると明確に伝えたり、白か黒かではなくグレーゾーンを見つけて留まれるように支援者が促すことも重要となる。

また、思春期のグループの中で、発達障害のある子がおとなしく従順な「下っ端」として扱われる場合や、独特のリアクションがからかいの対象になることもある。このようなからかいの対象となることで特に注意が必要となるのは、他者がそれほど悪意を持っていなくても、発達障害のある子の場合、他者の言動が傷つきとなって、長年忘れられない場合も少なくないということである。次に挙げるのは、こうした思春期の傷つきが後年にも影響を与えた事例である。

<事例3 Cさん(37歳・男性)>

大学卒業後、就職せずに、時折生活用品を買い物に出る以外は自宅に引きこもった生活を続けていた。しかし、30代半ばになり両親が高齢になり将来に不安が生じたことで、筆者が勤務する精神科クリニックの受診へと至った。精神科を受診したのには、自分はうつ病ではないかと考えてのことであったが、幼少期から続く対人コミュニケーションの苦手さや、興味関心の偏りからは背景に発達障害が疑われた。生育歴を聞く中で、Cさんは小学校高学年から同級生にからかわれることが多く、いじめの

ターゲットになりやすかったということがわかった。特に高校時代はいじめがひどく、その頃と同級生からされた行為（ライターで突然髪に火をつけられて、Cさんが驚く様子をおもしろがられるなど）が今もフラッシュバックとして蘇ることがあると言われた。また高校生の頃から女子生徒が怖いという思いが芽生え、現在も制服を着た女子生徒に会おうと恐怖心を感じるとのことであった。

Cさんは10代に体験した恐怖心が20年以上経っても軽減されることなく繰り返し想起されており、30代となった現在の対人不安の一因となっていた。通常辛い体験は時間が経つとともに衝撃が薄れていくものであるが、発達障害のある子の場合、体験の衝撃がそのままの形で残る「タイムスリップ現象」と呼ばれる記憶想起の問題となる場合がある。

杉山（2011）は、自閉症スペクトラム独自の体験世界と記憶の病理について、次のように述べている。自閉症スペクトラム障害の場合、普通に生活をしていても、怖い世界が広がっていて、トラウマ的になりやすく、その背景として、自閉症スペクトラム障害でよくみられる知覚過敏性が、健常者ではそれほど怖くないことにおいても、かなり怖い状況として体験されやすいこと、また、彼らの認知構造が、全体の把握が困難で、部分にとらわれやすい特徴を持つため、その結果、見通しの障害が生じ、不意打ちの体験や秩序の混乱が容易に引き起こされるとした。そして自閉症スペクトラム障害の場合、タイムスリップという、トラウマにおけるフラッシュバック類の記憶の病理が介在し、普通なら年月が経てば忘れてしまうようなことがいつまで経っても忘れることができず、長い時間がすぎたあとに、些細なきっかけで再現に至ることも多いとした。しかし、このような知覚過敏性やタイムスリップ現象は、本人にとっては自分の認知特性として自覚されていないことも多い。まずは自分がそのような認知特性を持っていると自覚できるように支援者が関わることも重要であると思われる。

6. 親離れ子離れを支える

ここまで、友人関係を中心に、発達障害のある子が思春期に抱えやすい問題について論じてきた。友人関係が思春期に入り複雑で多様になっていくのと同時に、親子関係も変化を見せるようになる。思春期はBlos（1962）が乳児期に続く第二の分離－個体化期と述べたように、子どもが親から心理的に自立する時期と言われてきた。また、思春期の親からの心理的分離のプロセスの中で、親や教師など周囲の大人や社会に対して、反発を抱いたり、反抗的な行動が現れることがある。これは幼児期の自己主張の芽生えにより生じる第一次反抗期に対して、第二次反抗期と呼ばれる。

さらに、Masterson（1972）は、思春期の親からの分離には、幼児期の母親からの分離に際して生じる見捨てられ不安とそれに伴う再結合のためのしがみつき、その失敗に対する抑うつが生じると述べており、そのプロセスは葛藤をはらみながら試みられるといえる。思春期は子どもを持つ親にとっても、心理的な子離れの時期ともいえ、親子がそれぞれ個と個としての新たな関係性を構築する時期といえる。

発達障害のある子の場合、この親子の心理的分離に際して特有の困難さが現れやすい。一つは、幼少期の関係性が継続し、思春期に入っても親子が密着した関係性を継続するタイプである。例えば、幼少期から我が子の発達支援を熱心に行ってきた母親が、子どもの年齢は思春期にさしかかっているにもかかわらず、子どもを心配するあまり、つい過保護になってしまうこともある。子育て

に熱心な母親ほど、どうしてもこの傾向が強まるように思われる。また、発達障害のある子の親は、子育てへの罪悪感が生じやすい。そのため、できるだけ力になってあげたいという思いが、この時期の親子関係を歪めてしまうこともある。

また子どもの方も、外の世界でのストレスを癒すため、母親に甘えようとし、退行した様子を見せることもある。中学生になった男の子が、小さい頃と同じように母親とのスキンシップを求めるという場合もある。男の子が性的な関心を恥ずかしそうな素振りも見せず、母親に話す場合もある。しかし、本人に恥じらいが見られない場合でも、異性の親との過度なスキンシップは避けるように促したり、性的な話題の相談役には同性の親や大人がなるなどの配慮が必要である。これは発達障害のある子に限ったことではないが、親子の心理的境界が曖昧で密着した関係性は、どうしても子どもの心理的自立が遅れがちになってしまう。思春期には親の側にも子離れの課題があるといえるが、特に発達障害のある子の場合、つい親の方が先回りをして子どもの手助けをしてしまったり、いつまでも幼児期からの親子関係を引きずりやすい。親子関係という緊密な人間関係で、適度な心理的距離を保つというのは難しい。だからこそ、思春期の発達障害の子どもに対しては、親の側が意識的に我が子に対して年齢に応じた関わりをすることが重要となるだろう。

7. お わ り に

本稿では、発達障害のある子が思春期にどのような躓きが生じやすいかについて概観してきた。心身ともに急激な変化を遂げる思春期は、発達障害のある子にとって一つの難関ではあるが、自己理解を深めるチャンスでもあるように思う。特に、思春期における自己形成は、その後の青年期のアイデンティティ形成につながる重要なテーマであるため、発達障害のある子の自己形成とその支援については、今後の重要な検討課題といえる。

また、発達障害のある子が自分自身の特性をどのように理解していくかということも重要なテーマである。幼少期から何らかのサポートを受け、すでに発達障害であるということを認識している場合と、思春期になって初めてわかる場合、思春期になっても本人も周囲も気づかない場合とそれぞれである。特に思春期になって初めて発達障害であるとわかった場合、それを本人や保護者にどのように伝えるのかということは、支援者側は常に悩むところであろう。

村田（2009）は発達障害と診断することが、単に診断するだけになると、困っている子どもたちの病態、病理の本質を把握して、的確で根気強い治療努力を続けることにはつながっていかないと危惧している。村田が述べるように、単に発達障害と診断名をつけただけでは、何の支援にもならず、場合によっては本人や家族を傷つけるだけになってしまったり、安易なラベリングが、本人の自助努力の意欲を削いでしまうこともある。この時期に最も重要な支援は、発達障害のある子が、傷つき、心を閉ざしきってしまわないように、そして少しでも希望を持って生きられるように支援することであろう。思春期に悩みながらも、自己理解を深めることは、発達障害のある子がその後の人生を生きやすくなる良いきっかけにもなりうる。そして、先にも述べたように、この時期に自分に自信が持てるような体験ができると、途端に表情がいきいきとし始めることがある。タイムスリップ現象のように、トラウマ体験が後々まで想起されることもあるため、良くも悪くも、発達障害のある子は体験したことの影響の表れ方が直接的であるように感じられる。そのため、この時期に少しでも良い体験を積み重ねておくことが、その後の人生を生き

る基盤を作るといえるだろう。

引用文献

- Blos, P. (1962) *On adolescence: A Psychoanalytic Interpretation* New York: Free Press. (プロス, P. 野沢栄司 (訳) (1971) 青年期の精神医学 誠信書房)
- Coleman, J. C. & Hendry, L. B. (1999) *The Nature of Adolescence, 3rd ed.* London: Routledge. (コールマン, J. & ヘンドリー, L. 白井利明 (訳) (2003) 青年期の本質 ミネルヴァ書房)
- 保坂亨 (2010) いま, 思春期を問い直す—グレイゾーンにたつ子どもたち 東京大学出版会
- 川上ちひろ・辻井正次 (2011) 思春期広汎性発達障害男児への性教育プログラムの検討—試行的実践からの分析— 小児保健研究, 70 (3), 402-411.
- Masterson, J. F. (1972) *Treatment of the Borderline Adolescent: A Developmental Approach* New York: John Wiley & Sons. (マスターソン, J. F. 成田善弘・笠原嘉 (訳) (1979) 青年期境界例の治療 金剛出版)
- 村田豊久 (2009) 子ども臨床へのまなざし 日本評論社
- ニキ・リンコ (2007) 自閉っ子, えっちらおっちら世を渡る 花風社
- 杉山登志郎 (2011) 発達障害のいま 講談社現代新書
- Sullivan, H. S. (1953) *The Interpersonal Theory of Psychiatry* New York: W.W. Norton. (サリヴァン, H. S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鍾幹一郎 (訳) (1990) 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 滝吉美知香・田中真理 (2011) 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解 発達心理学研究, 22(3), 215-227.
- 鳥居深雪 (2009) 脳からわかる発達障害—子どもたちの「生きづらさ」を理解するために 中央法規出版
- Wing, L. (1997) *The autistic spectrum: A guide for parents and professionals.* London: Constable. (ウィング, L. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫 (監訳) (1998) 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック 東京書籍)
- 吉田知子 (2003) 高機能自閉症・アスペルガー症候群「その子らしさ」を生かす子育て 中央法規

[2012. 9. 27 受理]